

第10回 第2章 武家社会の形成と生活文化のめばえ

## 平氏政権の登場

執筆・講師  
本郷和人

### 学習のねらい

日本の歴史の特徴として、およそ700年にわたって武士が政治のトップに立っていたことが挙げられる。その始まりとなったのが平氏の政権である。平氏を率いた平清盛はどやうやって政権を動かす地位に昇ったのだろう。また、平氏の政権はそれまでの藤原氏の政権や院政とどこが同じで、どこが異なっていたのかを学んでみよう。

### 保元の乱・平治の乱

長く院政を行った白河上皇の後継者は鳥羽上皇であった。白河・鳥羽上皇の院政の時期に、平氏は各国の国司を歴任することで武士の家来を獲得し、富を蓄積していった。やがて鳥羽上皇が亡くなると、上皇の子である崇徳上皇と後白河天皇が政権の座を巡って激しく対立した。藤原摂関家でも忠通と頼長の兄弟が権力争いをしていて、上皇には弟の頼長が、天皇には兄の忠通が味方した。両陣営は武士を集めて互いに戦ったが、勝利したのは天皇の呼びかけに応じた平清盛、源義朝であった。この戦いを保元の乱という。

保元の乱後、藤原通憲（信西）が政治を行ったが、そのやり方に不満を持った藤原信頼と源義朝が平清盛の留守中に兵を挙げた。通憲は討たれたが、信頼と義朝も兵を率いて都へ引き返してきた清盛に討たれた。これが平治の乱である。清盛は義朝の子、頼朝を捕まえたが命を奪おうとはせず、伊豆に流すにとどめた。

### 平氏政権

平治の乱で勝利を収めた清盛は、武士としては初めて、中央の政界で貴族として昇進していった。そしてついに太政大臣に出世を果たした。清盛は中国大陸の宋（南）と貿易をして（日宋貿易）、大きな利益を上げた。また500あまりもの荘園を所有し、経済力と軍事力を武器に貴族を従えた。平家一門の屋敷は京都の六波羅にあったので、この平家の政権を「六波羅政権」と呼ぶ。清盛は藤原氏と同じように、平家の女性を天皇の妻とし、平家の血を引く天皇を擁立した。

平家の一族は清盛にならって出世を果たし、「平家にあらずんば人にあらず」と誇るほどの栄華を極めた。後白河法皇はこうした平家の振る舞いに反発し、法皇に忠誠を誓う貴族を集め

て平家に対抗しようとするが失敗した。やがて1179年、軍勢を率いた清盛は法皇を幽閉して、ついに朝廷のトップに君臨した。

## 源平の争乱

清盛は自分の娘である徳子<sup>とくこ</sup>が生んだ安徳<sup>あんどく</sup>天皇を皇位に就けた。このことによって皇位への望みを絶たれた後白河法皇の皇子、以仁<sup>もちひと</sup>王は源頼政<sup>よしまさ</sup>とともに反平氏の兵を挙げた。王と頼政は平氏に討たれたが、「平家を討て」という王の命令書は全国の源氏に届けられた。

この命令書を受け取って立ち上がったのが、伊豆の源頼朝であった。1180年、頼朝は一度は平家軍に敗れた（石橋山の戦い）が、房総半島で再起し、多くの関東の武士を従えて鎌倉に入った。このあと富士川の戦いで京都から進軍してきた平家軍を打ち破ると、急いで京都に向かうのではなく、関東でじっくりと力を蓄える作戦を選択した。

同じころ、信濃で挙兵した源（木曾<sup>よしなか</sup>）義仲は、北陸に進出した後に平家軍と戦い京都を目指した。1183年、平家は都を追われ、義仲が京に入った。だが義仲は後白河法皇と対立して源義経<sup>よしつね</sup>ら鎌倉軍に滅ぼされた。このあと、鎌倉軍は平家軍を各地で打ち破った。1185年、平家は壇の浦で滅びたのである。

